



音坊山の位置図等は、市ホームページ「広報編集長の小窓」で紹介しています。

地図に載っていないなくても、名のある山はたくさんある。新野町の音坊山もその一つ。東方に開けた山頂からの眺めは壮観で、空気の澄んだ日には対岸の和歌山県まで望むことができる。この眺望を60年ぶりに復活させたのが、西光寺、岡花地区の有志でつくる「音坊山ふるさと活性化会」の皆さん。自慢の景色を酒の肴に、ふるさと談議に花を咲かせている。

阿瀬比町との町境にある大根峠から南西へ約800m。かつて、山頂には平和泉守信吉の居城（塁）があり、戦の舞台になった歴史をもつ。山腹には見渡す限りの萱野が広がり、その見晴らしの良さから、丹生谷方面への交通の要所としても重要な役割を担った。

やがて、城跡は地域の憩いの場として活用されたが、終戦を境にポツリと足取りが途絶えた。年月とともに道や城跡は荒廃。その変わり果てた姿に心を痛めた住民が立ち上がる。平成13年6月17日、1・5kmにも及ぶ山道を重機と人力で切り開くという、壮大なプロジェクトをスタートさせた。



音坊山祭では祝餅やお酒が振る舞われ懇親を深めた



事業の推進に情熱を注いだ故・西村幸和さんの志を受け継いだ鶴羽正喜さん（79歳）。「地域の財産ともいえる歴史的な山がありながら、住民の関心は低かったように思います。人口が減り、衰退しつつある地域に、何とか活力を取り戻したかった。紆余曲折はありましたが、最後には住民全員が賛同してくれました。作業は大変な時間と労力を費やしましたが、取り組んでよかったと思っています。先人たちの思いが宿るこの道を、たくさんの人に歩いてほしいです」と万感の思いを語る。音坊山復活にかけた地域の人々の一念が胸を打った。

重機で切り開いた道を手でならし、コンクリートを敷き詰めていく。沿道には4千本のアジサイと桜を植樹。そんな骨の折れる作業を10年近く続けた。

11月3日、音坊山祭。鶴羽さんは、若手の西村彰悦さん（60歳）に後を託した。鶴羽さんが地域活動に関わり始めたのもちょうどその頃だ。「できる限り支援する」と背中を押した。先輩たちが切り開きかけたのは、山だけではなかったようだ。